

## 根室市で検出されたネコの未成熟 多包条虫寄生例について

A case of immature *Echinococcus multilocularis* in a domestic cat in Nemuro, eastern Hokkaido, Japan

八木 欣平 高橋 健一 服部 畦作

Kinpei Yagi, Kenichi Takahashi and Keisaku Hattori

多包条虫 (*Echinococcus multilocularis*) の終宿主は、食肉目動物に限られ、現在までに、<sup>1)</sup>2科4属9種の自然感染例が報告されている（大林、1975）。北海道の流行地域においては、キツネ、イヌが主たる終宿主としての役割を果たしていることが明らかになっているが、ネコについては、安保ら（1954）が、礼文島のネコ2匹より各々1個体づつの成虫を検出したにすぎず、道東地区的流行地域においては、ネコの終宿主としての役割は不明のままである。

今回我々は、1979年8月31日に根室市牧の内で捕獲されたネコ（雌、推定年令1才）の小腸に認めた多数の未成熟多包条虫について、形態学的検討を行ったので報告する。

形態：形態の観察は、回収した虫体を10%ホルマリン溶液で固定し、セミコンカーミンで染色標本を作製後行った。虫体の計測は、無作為に抽出した30個体について行った。

体長は366–660 $\mu\text{m}$ （平均472.4 $\mu\text{m}$ ）、頭節のみであるが、後部は明らかに長くなっている、生殖原基と思われる細胞の集合体を認めた。吸盤の直径は54–90×42–87 $\mu\text{m}$ （平均74.9×65.0 $\mu\text{m}$ ）、頭鉤の数は14–30本（平均25本）、大鉤の長さは24–31.5 $\mu\text{m}$ （平均28.0 $\mu\text{m}$ ）、小鉤が18–27 $\mu\text{m}$ （平均20.8 $\mu\text{m}$ ）であった。形態的には、神谷ら（1981）が行った感染実験の結果と比較すると、感染後10日目のものに、測定値および成熟状態が、ほぼ一致した。

ネコの多包条虫の終宿主としての自然感染例については、安保らの報告の他に、北アメリカ、ヨルダンおよびドイツ南部での報告がある（Thompson & Eckert, 1983）。しかししながら、ネコの多包条虫に対する感受性については、<sup>4)</sup>神谷らの他にRaush & Richard（1971）、Crellin et al.（1981）およびThompson & Eckert<sup>4)</sup>の実験報告があるが、いづれの報告も、ネコがイヌに比べて明らかに感受性が低く、虫体の発育も悪いと述べている。

北海道東部の多包条虫流行地域においては、ネコの剖検

例が1966年以降現在まで、わずか27例にすぎない（北海道衛生部、1983）。Leiby & Kritsky（1972）は、アメリカ合衆国北部の多包条虫流行域において、ネコのヒトへの感染源としての重要性を強調しているが、今回得られた虫体は未成熟なものであり、北海道において、ネコが重要な感染源であるかどうかを明らかにするためには、剖検例を増やすなど、さらに疫学的な調査が必要であろうと考えられた。

本調査にあたり、検体の採取に御協力頂いた根室保健所職員の各位に深謝致します。

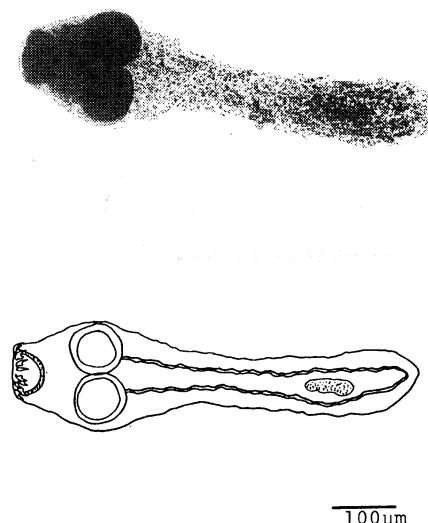


Fig. 1 Immature *Echinococcus multilocularis* in a domestic cat

## 文 献

- 1) 大林 正士: 北獸会誌, **19**, 146(1975)
- 2) 安保 寿他: 道衛研所報(特報), **4**, 1 (1954)
- 3) 神谷正男他: 寄生虫誌, **30**, (増), 30(1981)
- 4) Tompson R. C. A. & Eckert J.: Z. Parasitenkd., **69**, 335(1983)
- 5) Raush R. L. & Richards S. H.: Can. J. Zool., **49**, 1317(1971)
- 6) Crellin J. R. et al.: Am. J. Vet. Res., **42**, 1980 (1981)
- 7) 北海道衛生部: 昭和57年度食品衛生行政概要(1983)
- 8) Leiby P. D. et al.: J. Parasitol., **56**, 1141(1970)